

Title	Dome Osteotomy of the Pelvis for Osteoarthritis Secondary to Hip Dysplasia-An Over Five-Year Follow-Up Study.
Author(s)	Monzoor, Mustafa Anwar
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/38890
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

氏名	モンズールムスタファアンワール Monzoor Mustafa Anwar
博士の専攻分野の名称	博士(医学)
学位記番号	第 11310 号
学位授与年月日	平成6年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学研究科外科系専攻
学位論文名	Dome Osteotomy of the Pelvis for Osteoarthritis Secondary to Hip Dysplasia - An Over Five-Year Follow-Up Study. (臼蓋形成不全股に対するドーム状骨盤骨切り術 — 5年以上経過例の検討 —)
論文審査委員	(主査) 教授 小野 啓郎 (副査) 教授 小塚 隆弘 教授 越智 隆弘

論文内容の要旨

【目的】

1958年に河村が Ghiari の骨盤切り術の術式を改良して考案したドーム状骨盤骨切り術の合理性については、彼自身の経験例の報告を除くと、誰も詳細に分析した者はなかった。そこでわれわれは本術式の有用性とその適応を明らかにするため、自験例の長期成績を分析した。

【方法ならびに成績】

1978年から1986年の間に臼蓋形成不全股122例135関節に対し、本術式を行った。その中で5年以上経過観察のできた91例101関節に対し、その臨床像とX線学的な関節症の進行につき評価した。

術前の関節症の進行度は、日本整形外科学会の病期分類で前期40関節、初期31関節、進行期30関節、末期0関節であった。手術施行された反対側の股関節への影響も検討した。経過観察期間は5～14年(平均8.3年)、手術時年齢は15～55才(平均30才)であった。

Merle d' Aubigné 股関節機能評価で92%の症例が最終追跡調査時、優又は良の評価で跛行を呈する症例は、大転子下降が十分行われた場合に消失することが多かった。X線学的には91関節が良好な臼蓋のリモデリングを示し、関節症の進行は防止されていた。

本術式において骨盤をドーム状に骨切りすることと、大転子の引き下げによる股関節外転筋力の温存が良好な成績につながったものと考えられる。関節症の進行を10関節(9.9%)に認めたが、その中の末期に至った6関節はsalvageのために人工股関節全置換術が施行された。術前に関節症変化が進行期であるもの、外反股を呈するもの、高令、術後の外転筋力が回復しないものが、統計学的分析より危険因子であることがわかった。従って、手術適応においてこれら危険因子を十分考慮すべきである。また、手術側の反対側に対しては特に影響は認めなかった。

【総括】

ドーム状骨盤骨切り術は、臼蓋形成不全股のうち関節症性変化が前期および初期までの症例については、非常に有効な術式である。また、外反股(150°以上の頸体角)に対する内反骨切り術の追加や大転子の引き下げを10mm以上行うようにすることで、手術の成功をより確実なものにできる。

論文審査の結果の要旨

ドーム状骨盤骨切り術の概念は、河邨文一郎教授により1958年に考案され、臼蓋形成不全に対する生体力学的に、理にかなった手術方法と考えられている。しかしながら、実際的にこの手術方法の臨床的応用について、誰も詳細に長期成績を分析したものはなかった。

本研究では、臼蓋形成不全由来の変形性関節症に対する本術式の5年以上の長期成績を分析し、成績不良に関する危険因子を明らかにするとともに、正しい適応で、正確な手術が行われた症例において、本術式の優れた効果と、その概念の妥当性が示された。この結果は、本術式の適応決定において究めて有用な知見であり、学位に値する研究と考えられる。